

どんな親孝行をしていますか？

上 廣 榮 治

若い人から、「親孝行したいのですが、何をしたらいいか教えてください」とよく聞かれます。これは、自己中心主義が蔓延する現代社会特有の現象かと思つていたら、落語の世界にもありました。

古典落語に『二十四孝』という噺があります。『二十四孝』は、もともとは中国の元の時代に編纂された書物で、後世の範となるような二十四人の親孝行の事例を紹介したものです。

長屋に、三日にあげず喧嘩騒ぎをしている乱暴者の職人がいます。この日も、つまらないことでまた夫婦喧嘩になり、仲裁しようとした母親まで蹴飛ばしたと聞いた大家さんが、職人を呼んで説教します。

「親が食う道を教えても人の道を教えないから、お前のようなべらぼうができてしまう。親孝行は、親が生きてるうちにしておけ。昔は目立った孝行をすれば、お上から褒美がもらえたもんだ」と言うと、職人は「あつしも、その孝行つてやつをやつてみよう。で、何をすればいいんです？」と聞く。そこで大家さんが中国の『二十四孝』の話をし、孝行の具体例を教えていきます。

たとえば、王祥という人の話。母親が真冬に鯉を食べたいと言いますが、河には氷が張つていて魚の影さえ見えません。悲しんだ王祥が服を脱いで氷の上に突つ伏したところ、氷が溶けて鯉が二匹河から躍り出たといいます。これを聞いた職人は、「間抜けだねえ。氷が溶けたら、自分が河に落つこちて往生（王祥）してしまうじゃないか」と言いますが、大家は「お前のような親不孝者なら命も落とそうが、王祥のような孝行者は、その威徳を天が感じて落つこちないものだ」と答えます。

また、呉猛という人は、貧しくて蚊帳を買うお金がなかったので、服を親に着せ、自分は裸になって体に酒を塗り、蚊を引きつけようとした。すると、その行いに天も感じ入り、蚊が寄りつかなくなったというのです。

そんな話を聞いた職人は、さつそく真似をしようと家に帰りますが、母親は鯉が嫌いだと言う。それでは蚊をやっつけようというので、裸になり、体に酒を吹きつけて寝ようしますが、つい、その酒を飲んでしまい、酔いつぶれて寝込んでしまう。翌朝起きてみると、ひとつも蚊に刺されていません。喜んだ職人が、「おれの親孝行に、天が感じ入ったのだ」と言うと、母親いわく、「なにを言っているんだい。あたしが夜つびて扇いでいたんだ」。

この落語は、親不孝者がその気もないのに、マニユアルにしたがつて親孝行の真似事をすることを笑いとばしているのですが、同時に『二十四孝』の孝行話そのものも、笑いの対象にしているように思われます。それはともかく、道徳の教えとして大いに流布していた『二十四孝』ですが、これに噛みついたのが明治の啓蒙思想家、福沢諭吉でした。

福沢は『学問のすゝめ』の中で、利のためでも名のためでもなく、「天然の誠」をもって親に孝行するのは当然のことだとしつつも、孝行を勧める『二十四孝』やその類の書物は、人にできないことを勧め、

あるいは理に反することを孝行としていっていると、批判します。たとえば、自分の体に酒を塗って、親を蚊から守るくらいなら、その酒代で紙帳（紙でできた蚊帳）を買うのが智者であると言うのです。

福沢諭吉はさらに、こういう書物が説く孝行は、上下の秩序を第一とする発想によるもので、むやみに子ばかりを責めていると批判します。「妊娠中は母を苦しめ、生まれてから三年は父母なしでは生きられないのだから、その恩ははかりしれないほど大きい」というのが、親孝行をすべきだという理由になっているが、そんなことはどんな動物もやっているではないか。人間の親たるもの、衣食を与えるだけではなく、「人間交際の道」を教育しなければならぬ。その大切な道を子どもに示しもしないで、悪例ばかりを見せつけて、一方的に親への孝行を求めるとは、破廉恥もはなはだしいというのが、福沢の論でした。

実際、福沢が指摘するように、戦前の道徳には、親孝行を一方的に子どもに強制するところがありました。とりわけ学校教育では、孝行を主君に忠義を尽くすことと一体のものとする「忠孝一致」の考えが広められました。天皇と臣民の関係が、親子の関係になぞらえられ、「忠を離れて孝は存しない」とか、「親孝行はお国のため」という国民教育がなされたのでした。そのため戦後は、「孝行」という言葉が軍国主義の残滓でもあるかのように敬遠されて、やがて忘れ去られていったのです。

私たちは「朝の誓」で、「三つの恩を忘れず」と唱和します。言うまでもなく、親の恩、師の恩、社会の恩を忘れることなく、感謝の思いを胸に、今日一日を過ごそうということです。そこでいう「恩」とは、忠節や恩返しを求める打算ずくの恩ではなく、何ものをも求めない無償の恵みであり、無限の愛ともいふべき恩のことです。そうした恩への感謝の思いこそが、倫理実践の原動力であるのです。

「朝の誓」の第一条が伝えようとしているのは、福沢諭吉が言う「天然の誠」、つまり「大自然の摂理」に従って素直に生きていこうということです。親と子、先生と生徒、社会と個人が、心豊かな愛和の関係を築いていくことを目指すもので、子や生徒や個人が、親や先生や社会に一方的に従い、尽くすことを求めるものではありません。一人ひとりが、生かされていることに気付き感謝し、利他の生き方をしていくということなのです。

素直で自然な親孝行の心は、親が子を慈しみ、子が親を大切にすると、双方の愛和の関係の中でこそ育まれるものです。

日本の実業界に大きな足跡を残した渋沢栄一は、『論語と算盤』という著書の中で、「親は自分の思い方を無理強いをしても、本当の孝行が生まれ育つことはありません。親孝行とは子だけの問題ではなく、親の問題でもあるということ」を、私たちはしっかり認識しておく必要があるでしょう。

しかし、子どもが「いい親でなければ孝行しなくてもよい」と考えているとしたら、それも問題です。親子の関係はよくも悪くも鏡のような関係なのです。もしあなたに、家庭愛和に向かつて一步を踏み出す気持ちがあれば、親孝行のためのマニュアルなど、まったく不要ということなのです。

それでも、親が喜ぶこととは何でしょう。親の一人としてあえて言うなら、「一番うれいのは、子どもが立派に自立して仕合わせに暮らしていることです。世の中のお役に立っていることです。孫たちが健やかに成長していることです。それが一番の親孝行なのです。何かをしてくれたらうれしいというのは、それからずつと先のことなのです。